

言及し、結論として日本文化は「恥の文化」の代表であるとしている。この知見は、現在ほぼ定着している。ベネディクトが指摘したように、日本人は行動の根幹に常に身近にかかわりのある他人を意識し、その他人に対して恥かしいという意識が行動を起させたり止めさせたりするのである。日本人が罪の意識よりも恥の意識を重視するのは、武士階級成立以来の伝統と幼児期から恥を強調する教育を続けてきたためとベネディクトは見ている。この「恥」に関する諺は、日本には相当数ある。例えば、

恥は家の病

恥の上塗り

仰いで天に恥じず

言わぬ心に恥じよ

恥を言わねば理が聞こえぬ

恥を知らねば恥かかず

恥を知る者は恥かかず

聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥

などは、いずれも「恥」に関する日本人の考え方を表わしており、日本人の心性の中には身近のかかわりのある他人に対する「恥を恐れる」という心理が根深く存在していることが分かる。上にあげた諺のほかにも、次のようなものがある：

石橋を叩いて渡る

「石で作られた橋であっても叩いて、大丈夫だと確かめてから渡る」という意味である。はたから見ると滑稽な感じがするが、すべての物事に対する日本人の用心深さがみごとに表現されている。これはやはり上に述べたように、日本人は恥を恐れ、常に他人の目が気になり、他人に笑われまいように行動するという特性がよく現われている。日本人の国民性とも思われる恥を恐れる心理はまたいくつかの諺から見とることができ。例えば、

転ばぬ先の杖

濡れぬ先の傘

念には念を入れ

などのようなものがそれである。

て、自然や社会に対する人々の見方・考え方が窺い知れる。加えて、諺はその民族の歴史や風俗、文化と深くかかわっているものが多く、その民族特有の特性が濃厚に反映していることよって、日本と中国の諺から両国の人々に特有の世間観も窺い知ることができよう。

2. 世間観について

人間と社会の関係について、四つの議論があると指摘されている。すなわち、①社会は個人の集合体であるが、個人は社会より重要な単位であると考える個人主体論、②社会は個人の総合以上のものであると考える社会有機体論、③個人と社会は互いに関係し合うと考える個人社会相互論、④個人と社会は対立する概念ではなく結局は同じもの、あるいは次元の異なるものとして対置すると考える融合論の四つである。¹²

2. 1. 日本人の世間観

穴田(1982)は、個人と社会について日本人は、「社会は個人の総合以上のものである」という社会有機体説のように、極端ではないにしろ、社会優位の行動傾向を有する国民であるとされている¹³と指摘している。この日本人特有の世間観が、諺にどのように反映されているのかについて検証してみよう。

例えば日本の諺には、次のようなものがある：

壁に耳あり障子に目あり

旅の恥はかき捨て

あとには野となれ山となれ

これらの諺からは日本人の社会に対する見方や考え方が窺い知れる。すなわち、「壁に耳あり障子に目あり」は、日本人は行動するとき、いつも他人あるいは社会が自分をどう見ているか、社会にどう思われているかということに気がなり、自分の行動が他人の目に左右されることがあるが、ここで言う「他人」とは身近にかかわりのある「他人」のことである。だからこそ、身近にかかわりのある「他人」の範囲を超えた他人や社会に対しては、「旅の恥はかき捨て」や「あとには野となれ山となれ」となるのである。

文化人類学者ルース・ベネディクトは、文化には「罪の文化」と「恥の文化」の二つのパターンがあるとし、その書『菊と刀』において、日本文化について